九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

国際文学倫理学批評研究会第八回年会及び国際学術シンポジウム

曹，雅潔
九州大学大学院地球統合科学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/2320102

出版情報：九大日文. 32, pp.67-69, 2018-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

◎イベント・レビュー

国際文学倫理学批評研究会第八回年会及び国際学術シンポジウム

曹（CAO） 雅潔（Yajie）

二〇一八年七月二十七日から三十日まで、北九州国際会議場（日本・福岡県北九州市小倉北区）で国際文学倫理学批評研究会第八回年会及び国際学術シンポジウム（以下、本年会とする）が開催された。文学倫理学批評研究会は、文学倫理学批評理論の発展と文学批評領域の国際学術交流を促進するため、二〇一一年に発足した。以来、イギリス、エストニア、韓国などで年会を開催し、二〇一八年で第八回目を迎えた。

本年会は、国際文学倫理学批評研究会、浙江大学世界文学学際研究センター、華中師範大学国際文学倫理学批評研究センター、華中師範大学『外国文学研究』編集部、九州大学が共同で主催し、中国、日本、韓国、アメリカ、ロシア、ドイツ、フランス、カナダ、スペイン、デンマーク、ブラジル、フィリピン、インドネシアなど、十余ヵ国から二六〇名以上の研究者が集まった。参加者は三十二のテーマ別会場で、文学倫理学批評を中心テーマに研究発表し、国を超えた学術交流を行った。

本年会の開催に際して、国際文学倫理学批評研究会会長のClaude Rawson教授が祝辞を寄せた。Rawson教授は、文学倫理学批評の国際的な影響力が日々強まり、理論体系が完備されつつあることに感心を表明した。そして、二〇一八年の世界哲学大会での「聶珍釗教授の倫理哲学」特別研究会設立についても祝意を表した。

開会式の挨拶では、九州大学大学院地球社会統合科学府長の中野等教授が、九州大学大学院比較社会文化研究院と地球社会統合科学府について紹介したうえで、本年会の意義を高く評価した。北九州国際会議場は八年前に開催された東アジア文学フォーラムの会場であり、ノーベル文学賞を受賞した莫言氏が講演した場所でもある。また、日本近代文学史上著名な作家である森鷗外が暮らした場所であり、松本清張の故郷でもある。こうした〈文学趣味〉が溢れる街でシンポジウムを開くことは意義深い。中野教授はこのように述べた。

また、国際文学倫理批評研究会執行副会長の浙江大学聶珍釗教授は、本年会の準備・開催にあたって各方面で尽力した九州大学波潟剛教授に謝意を表した。そして、理論と思潮の相違点から出発し、文学倫理学批評が文学批評において有効な理論であることを述べた。文学倫理学批評には、基礎理論だけでなく言説体系もある。例えば、理論における基礎用語の一つである「倫理選択」は、"ethical selection"と"ethical choice"の二つの概念を指す。倫理選択のプロセスにおいて、倫理意識の発生と善悪観念の形成は教誨（teaching）によって実現される。人は教誨と学習（learning）を通して人間の本質を得、道徳ある人間

になるのだと説明した。

また、本年会では世界の著名な研究者十名を招いて、基調講演を行った。以下、各基調講演の内容を簡単にまとめる。

七月二十七日午前中の基調講演は二部に分けられ、前半（聶珍釗教授、Wolfgang G. Müller教授）は英語で、後半（波潟剛教授、李俄憲教授）は日本語で行われた。

聶珍釗教授は、"The Forming Mechanism of Brain Text and Brain Concept in Theory of Ethical Literary Criticism"というテーマで、脳テキストと脳概念の形成について講演を行った。脳テキストは人間の思想や行為を決定するプログラムであり、コミュニケーションや情報伝達だけではなく、人間の意識・思索・判断・選択・行動・感情などの生活方式や道徳行為を決定するものであり、人間存在の本質に深く関わっていると指摘した。

国際文学倫理学批評研究会副会長のイェーナ大学 Wolfgang G. Müller教授は、"What Is the Worth of Human Life? The Dilemma of Whom to Save in Emergency Situations in Philosophy and Literature"というテーマで講演を行った。哲学と文学の関わりから出発して、重大な場面における倫理ジレンマに焦点を当てた。古代ギリシアの哲学者カルネアデスと共和政ローマ末期の哲学者キケロの見地に遡ることを通して、十八世紀から二十世紀末の文学作品に見られる倫理ジレンマに関する表象を確認した。そのうえで、哲学と文学という二つの位相から危機倫理について見解を述べた。

九州大学波潟剛教授は、「理論紹介：文学倫理学批評との対話」というテーマで講演を行った。波潟教授は、聶珍教授との文通で検討したヘミングウェイ「老人と海」の読みを提示し、日本人研究者としての文学倫理学批評の受容を振り返った。

華中師範大学李俄憲教授は、「川端康成『千羽鶴』における倫理価値論」というテーマで講演を行った。李教授は川端康成「千羽鶴」を例に、作中人物が倫理混乱から倫理困惑を経て、倫理選択に至るまでのプロセスを分析し、作品読解において倫理意識と倫理選択に着目することの重要性を指摘した。

七月二十八日の午後には、ロシア、中国、ノルウェー、デンマーク、フィリピン、日本の研究者が基調講演を行った。

国際文学倫理学批評研究会副会長のロシア国立大学 Igor. Shaytanov教授は、"World Literature as a Challenge and Ethical Problem"というテーマで講演を行った。Shaytanov教授は、ロシア文学史・文学理論研究者のアレクサンダー・ベセロフスキーが打ち出した「歴史詩学」を念頭に置いたうえで、モラッティ、ダムロッシュ、ゲーテなどの世界文学に関する概念を援用し、倫理が世界文学を構築するうえで果たす機能と作用について検討した。Shaytanov教授によれば、今日の世界文学の特徴は地域性と多様性が併存していることだという。それゆえ、文学倫理学批評は世界文学詩学として考えられるのである。

国際文学倫理学批評研究会副事務局長の上海交通大学尚必武教授は、"Ethical Ways of Worldmaking"というテーマで講演を行った。尚教授は西欧研究者による世界構築に関する論述を振り返ったあと、文学倫理学批評に立脚した世界構築における倫

理方式について論じた。そのうえで、イアン・マキューアン「贖罪」を例に、倫理の視点から世界構築について論じた。

国際文学倫理学批評研究会副会長のオスロ大学 Knut. Brynhildsvoll 教授は、"You have to change your life. A response to Peter Sloterdijk"というテーマで講演を行った。Brynhildsvoll 教授は、現代ドイツ哲学者のペータースローターダイクの著作でベストセラーでもある *You have to change your life* を文学倫理学批評の文脈で考察した。Brynhildsvoll 教授は、スローターダイクが打ち出した免疫システムの再構築には倫理の要素を付け加えるべきであると指摘する。そうすることで、全人類の適応性が強化され、人類の生存も保障できるのだという。文学倫理学批評は人類の運命にとっても深い意義を持っている。

南デンマーク大学 Johannes Noerregaard Frandsen 教授は、"Hans Christian Andersen and Ethical Literature"というテーマで講演を行った。Frandsen 教授は、童話は子供のためだけに書かれるわけではないとし、青少年も大人も童話の世界に共感し、童話に登場する人物の倫理選択から、自身が人生で直面するかもしれないチャレンジとジレンマが見出されると指摘した。我々はアンデルセン童話を読むことを通して、人間がなぜ人間であるか問われる。これはほかでもなく、アンデルセン童話の倫理価値である。Frandsen 教授はこのように述べた。

サントトーマス大学 Maria Luisa T. Reyes 教授は、"The Ethical in the Aesthetic: The Aesthetic in the Ethical in Literatures from the Philippines"というテーマで講演を行った。Reyes 教授は、世界文学における倫理転向は美学の転向と絡み合って発展してきたと指摘し、フィリピンの文学史を整理することを通して、その主張を論証した。

福岡大学大嶋仁名誉教授は、"Ethic in Interdisciplinary Studies"というテーマで講演を行った。大嶋名誉教授は、エマニュエルレヴィナスの「他者」に関する解釈を踏まえ、比較文学の発展史から出発して、比較文学学際研究の本質を分析した。そのうえで、文学と科学との結びつきは歴史的に必然であると指摘した。

以上が、二日間に行われた各基調講演のまとめである。

本年会では多数の研究者の参加に加えて、研究発表のテーマも〈文学〉を題材として多方面にわたった。各発表者は、欧米文学、日本文学、中国文学、比較文学、比較文学と世界文学、児童文学、劇文学、文学学際研究などのテーマに分かれてパネル発表を行った。国を超えた学術交流によって文学研究の情報交換が行われただけでなく、各国の研究者が今後の研究に繋がるような示唆を得たと思われる。その意味において、本年会は文学倫理学批評を世界中に発信することはもとより、その発展にも寄与したといえる。

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程二年、中国・江蘇大学外国語学院講師）